ベー・アー・フローリン原著

フローリンの土質力学

赤井浩一監修・大草重廉訳編

土質力学の体系化は，今世紀初頭からアメリカ合衆国ならびに西欧諸国の研究者・現場技術者の手によって行なわれてきた。このため，われわれの目は必然的にこれらの発展の動向にそそがれることになり，ソビエト連邦における土質力学の状況を積極的に知ろうとする試みは少なかったようである。もちろん，諸種の国際的会議等を通じて，その水準がかなり高いことは十分予想されていた。

最近になって，ソコロフスキーやその他の研究者の著作が訳出され，さらには土質力学に関する専門誌が容易に入手できるようになるにつれ，ソビエト流の土質力学の全貌が明らかにされ，わが国の研究者にも少なからぬ影響を与えるようになった。

本書は，ベー・アー・フローリンによる原著を翻訳したものである。全3巻からなるかなり膨大なものであり現在第Ⅱ巻まで出版されている。

第Ⅰ巻は6章からなっている。第Ⅰ章・第Ⅱ章は土の基本的概念の説明であり，第Ⅲ章では複雑な性質を有する土をいかにして簡単なモデルにして計算の手順の中に繰り入れるかを説明している。第Ⅳ章以下第Ⅵ章に至るまで，がいわゆるソビエト流のアプローチの仕方がはっきり現われているところであり，構造物基礎地盤内の応力状態について，実に細かく例をあげ説明がなされている。

一方，第Ⅱ巻は5章で構成されている。第Ⅰ章は前巻からの続きで，構造物の変位解析に関するものである。第Ⅱ章は，土中の気体分離と蒸発現象についての記述であり，われわれにあまりなじみのない部分である。第Ⅲ章～第Ⅴ章は圧密に関する説明であるが，とくに第Ⅳ章は原著者の専門の分野であるため，くわしい記述がなされている。第Ⅴ章は，これら圧密問題の数値解析法についての説明である。

本書は従来のこの種の翻訳と異なり，ソビエト流の記号や数字表示法をわれわれになじみ深いものに変える努力がなされており，非常に読み易い。ただ，全体として例題の数が多いためやや冗長の感をまぬかれない。［き］

森北出版刊，A5判・444ページ（第Ⅰ巻）／354ページ（第Ⅱ巻），定価 2000（第Ⅰ巻）／1800円（第Ⅱ巻）

浅井新一郎・内山茂樹著

道　路　標　識

この 1～2 年は，自動車による公害が社会問題としてクローズアップされ，道路事業に対しても否定的意見が強くなっている状況である。しかし，それにもかかわらず日本のモータリゼーションは進み，交通態争はいっそう激化するものと考えられ，道路標識の果たす役割は重要になってくる。

日本の道路標識の不備は，一度先進諸外国を旅行した人なら痛切に感じられるものである。さらに海外を旅行するまでもなく，一般ドライバーから歩行者に至るまで，皆が日常生活において，その不備を身にしみて感じているはずである。この不備のために悲惨な交通事故さえ起っている状況にある。

本書にこのような社会的諸問題を背景のひとつに入れて，体系的網羅的に書かれたもので，内容は次のとおりである。Ⅰ 道路標識とその歴史，Ⅱ 日本の道路標識と外国の道路標識，Ⅲ 道路標識の法制，種類，様式，Ⅳ 案内標識，Ⅴ 警戒標識，Ⅵ 規制指示標識，Ⅶ 設置計画，Ⅷ 設計，Ⅸ 維持管理。

すなわち，原始交通時代の道路標識から論が始まり，現在の自動車交通時代における，道路交通の高速化，長距離化，交通量の増大などの道路交通の変化により，道路標識がどのような役割を持っているのかを述べ，この役割から道路標識が案内・警戒・規制に分けられる過程を示し，そのおのおのについて，各種資料や実例を織りまぜながら教科書的に記されている。したがって，道路標識に関与する実務者が，いかにしてこれらの知識を実務に取り入れるかが大切であるが，標識に対する社会の認識がまだ甘い現在において，いっそうの努力が望まれる。

道路はつくっても，魂である道路標識をうまくとり入れないと，せっかくの道路も効率的に安全に作ることができなくなる。そのような意味において，単に道路標識にたづさわる人達ばかりでなく，本書が広く読まれることによって，道路標識が社会の要求として積極的に高められる必要がある。

前述したように，本書は体系的網羅的にまとめられたものであるので，道路標識の各分野においてもっと専門化が進み，実務に積極的に取り入れられることを期待したい。［ほ］

技術書院刊，A5判・205ページ，定価 800円